

誠実に生きる



“誠実に仕事をする？ そんなこと、所詮きれいなことだよ”
今日のような厳しい経済状況の中では、そんな声が聞こえてきそうです。
しかし、今日、私たちが豊かで便利な生活を享受できるのは、多くの先人たちが、
これまで誠実に仕事に取り組んできたからではないでしょうか。
今月の『ニューモラル』では、仕事を通して誠実さについて考えます。

乱暴な言葉

ある印刷会社の営業部に勤める池田さん（45歳）は、差し迫った業務のため夜遅くまで仕事をし、何とか期限内に間に合わせる事ができました。大変でしたが、自分の納得できる仕事ができ、心地よい疲労感を感じるのでした。

帰宅途中、池田さんは深夜のコンビニエンス・ストアに寄りました。レジの近



くの商品棚しょうひんたなで品物を選んでみると、中年の客がレジ・カウンターの前に立ち、若い店員に向かって、大きな声で文句もんくを言っています。

どうやら店員が値段ねだんを間違まちがえたようです。店員はすぐに計算をやり直しましたが、客は「しつかりしろ！」と高飛車たかびしゃに言っつて店を出ていきました。店員は無言むげんのままでしたが、客が店を出たあと、「チエツ、ふぎけんじやねえ。やつてられないぜ！」と、乱暴らんぼうな言葉をはき捨すてました。

池田さんは、その店員の態度で嫌いやな気分になり、何も買わずに店を出ました。

自宅へ帰る間、店員の言葉が耳から離れない池田さんは、二十年前の自分を思い出していました。



努力は報われる

池田さんが入社して間もないころ、上司の今井さんといっしょに納品の立会いのため得意先を訪問したことがありました。みかん箱の半分ほどの大きさに梱包された印刷物を納めるため、池田さんも倉庫でトラックから重い品物の積み降ろし作業を手伝いました。約一時間、得意先の社員といっしょに懸命に運びました。すべての作業が終わったとき、池田さんは思わず、「終わった！ これ

やっと帰れる」と叫んでしまいました。会社に戻る途中、池田さんは今井さんから強く注意されました。

「池田くん、お客さんの前で、あんな言葉は言ってはいかん。大変なのはだれにも分かっていいる。苦しくても仕事は丁寧に、心を込めて地道に努力を重ねれば、必ず報われる」

今、池田さんにその言葉がよみがえってきたのです。

当時の池田さんは、働く目的は自分らしさを発揮して、収入を得るためである〃と思っていました。しかし、今井さんの言葉をきっかけにそれだけではないと考えるようになったのです。

池田さんは、その後も事あるごとに今井さんから親身に指導されました。



仕事を することは、 自分を磨く こと

数年後のこと。なじみのお客さんから、日程的にかなり厳しい注文がありました。今井さんは「うちを見込んでの仕事だ。喜んでやらせてもらおう」と引き受けました。池田さんは内心、「急ぎなんだから、多少、雑ざつになっても仕方ないな」と思いながら取り組みました。

池田さんは持ち前の行動力を発揮して、社内はもちろん、取引業者とりひきやにも頭を下げて、至急の仕事をお願いして回りま

した。責任感に動かされて懸命に努力している池田さんでしたが、その心は、注文先に対する不満、自分の言うことを聞いてくれない社内の人間や取引業者に対するいらだちでいっぱいでした。そんな気持ちは言葉にこそ出さないものの、時にはイライラのため、見本の印刷物を思い切り破り捨てることもありました。

そんな池田さんの姿を見ていたのでしょうか。あるとき、今井さんが声をかけました。

「かなりきつそうだね」

「ええ、まあ。でも何とかやつちやいますよ」

「それは頼もしいね。仕事をするつてことは、自分を磨くことと同じなんだ」

「はあ？」

意味が分からない池田さんに今井さんは言いました。

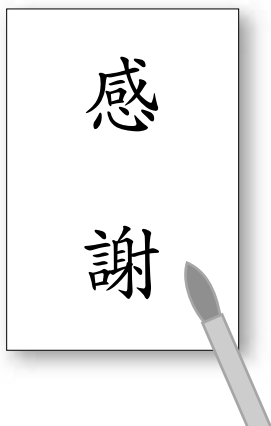
「自分を大事にする人間は、どんな仕事も大事にする。だから、商品に自信が持てる。それが仕事をする人間の誇りになるんだ。丁寧に心を込めて地道に努力するということは、そういう心づかいの積み重ねなんだ。大変だと思うが、よろしく頼むよ」

そう言つてデスクに戻る今井さんに、池田さんは「はい……」と答えるだけでしたが、それが自分に対する助言であることは分かっていました。



仕事は一人では できない

池田さんは、今井さんの言葉を何度も繰り返すうち、気づいたことがあります。



それは、仕事は一人ではできない。多くの人たちの協力のできる。その人たちに不平不満を抱きながらいい仕事なんてできない。仕事を大事にすることは、仕事を支えてくれる人たちを大事にし、感謝してこそ、いい仕事に結びつく、ということでした。

池田さんは、この気づきを忘れないように、用紙に「感謝」と書いて目の前に貼り、この仕事の最後まで誠意をもって取り組もうと誓ったのでした。それから池田さんは、いつそう積極的に走り回りましたが、気持ちはすっきりし、むしろ謙虚になりました。

みんなの協力で、期限内に仕事を成し遂げたとき、池田さんはそれまで味わったことのない充実感を覚えました。今井



さんからのねぎらいの言葉、お客さんからの感謝の言葉も、池田さんに自信と喜びを与えました。それは人の役に立つ喜びであり、新たな働く意味の発見でもありました。まさに努力が報われた瞬間でした。

そして今、会社の幹部社員として働く

池田さんは、仕事のみずからの誇りと幸福感につながっていることを実感しています。

コンビニエンス・ストアの店員の言葉から昔の自分を思い出した池田さんは、あの若い店員が働く喜びを見いだしてくれるように願うのでした。

仕事と生き方はつながっている

私たちの働く環境は、時代によって大きく変化します。また働く意識も変わります。しかし、いつの時代も、仕事の中に働く喜びを見いだし、仕事を通して誇りある生き方を求めようとすることは変わらないうでしよう。

他人から見れば恵まれた仕事であつても、仕事がおもしろくないと不平不満を漏らす人がいます。一方、与えられた仕事に地道に取り組み続けることで、自分の仕事に愛着が生まれ、その仕事が自分にとって適性であると思うようになった人もいます。

その違いはどこにあるのでしょうか。それは仕事に対する姿勢、つまり生き方の中で仕事をどのようにとらえるかという違いにあるのではないのでしょうか。

昔から、日本人は誠実に生き、誠実に仕事をしてきました。今も多くの人は、誠実に仕事に取り組んでいます。

ところが、一部の人々や企業が起こす不祥事は、その原因が、無責任、怠惰、手抜きなど、まさに不誠実という言葉でしか表せないようなものです。さらに、テレビや新聞から伝えられる事件の中には、良識や分別もあると思われる人々



が犯罪に走るなど、その倫理観を疑いたくなるニュースさえあります。

また、世の中には、お金を得るためならば、少しぐらい不道徳なことを行っても構わないという風潮があり、「誠実に仕事をする」など死語のようです。

しかし、現在の日本が高い生活水準にあるのは、私たちの先人が誠実に仕事と向き合ってきたことによつて築き上げられたものです。今日の私たちは、それを享受しているにすぎないのではないのでしょうか。

多くの日本人が誠実な生き方、仕事に対する誠意を失えば、先人たちが長い年月をかけて築き上げてきた今日の日本はやがて衰退の道を歩み、不誠実で品格のない国になってしまうでしょう。

高い道德性に支えられていた

日本人

百五十年ほど前、明治の日本にやってきた外国人は、当時の日本人の誠実さに驚いています。

トロイア遺跡を発掘したことで知られるハインリッヒ・シュリーマンは、清国を経由して慶応元年（一八六五年）に日本を訪れ、一か月ほど滞在し、克明な記録を残しています。

日本に入国する際の税関の役人とシュリーマンとのやりとりは次のようなものでした。

「（役人は）中を吟味するから荷物を開

けるように指示した。荷物を解くとなると大仕事だ。できれば免除してもらいたいのだと、官吏二人にそれぞれ一分

（二・五フラン）ずつ出した。ところが、なんと彼らは、自分の胸を叩いて「ニッポンムスコ」（日本男児？）と言い、それを拒んだ。日本男児たるもの、心づけにつられて義務をないがしろにするのは尊厳にもとる、というのである」

（石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社学術文庫）

さらに、シュリーマンを護衛する役人

について、次のようにも語っています。

「その精勤せいきんぶりには驚おどろかされるのだ。彼らに対する最大の侮辱ぶじよくは、たとえ感謝の気持ちからでも、現金を贈ることであり、また彼らのほうも現金を受け取るくらいなら『切腹せつぷく』を選ぶのである」(『前掲書』)



ここに書かれていることは当時の武士階級かいぎゅうだけが持っていた特性とくせいでなく、一般庶民しよみんもたいへん高い道徳性を身に付けていました。

明治初期の東京大学で生物学を教え、大森貝塚おおもりかいづかを発見したアメリカ人のエドワード・シルベスター・モースは次のように述べています。

「人々が正直である国にいることはじつに気持がよい。私はけつして札入さついれや懐中時計ちゆうとけいの見張りみはりをしようとはしない。錠じようをかけぬ部屋の机の上に、私は小銭こぜにを置いたままにするのだが、日本人の子どもや召使めしつかいは一日数十回出入りしても、さわってならぬ物にはけつして手を触ふれぬ」

(石川欣一訳『日本その日その日』平凡社)

明治の初めに日本を訪れた外国人は、日本人が持つていた誠実さに驚き、尊敬の念さえも抱いていました。これは遠い過去の話ではなく、現在、生きておられるお年寄りの両親や祖父母の時代のこと

なのです。私たちの先人は、いつの時代でも、世界のどこでも通用する、日本人の魂とも言うべき、高貴な精神を守り伝えてきました。

仕事への誇りと責任

このような日本人の誠実さは、なくなってしまうたわけではありません。今を生きる私たちにも心の深いところでつながり、伝わっています。

飲食店を経営する小林さんは、造園業者の田中さんに依頼して、店の前に小さな庭を造りました。数坪の日本風の庭ですが、数本の樹木も植えられて、店の雰

囲気が良くなり、たいへん気に入りました。

しばらくして、小林さんは庭の落ち葉がきれいに掃除されていることに気づきました。だれが掃除したのだろうかと思議に思っていたのですが、あるとき、その理由が分かりました。

夕方、店に行くと、田中さんが落ち葉

とごみを集めて自分の軽トラククの荷台に乗せて走り去って行くのを目撃しました。すでに造園の仕事は完了したにもかかわらず、田中さんが時々、庭の掃除を
してきてくれたのです。

小林さんが電話でお礼を言うと、田中さんは「お礼を言ってもらうほどのことではありません。現場が近かったので帰りに寄っただけです」と答えました。そしてさらに、「親方から教えてもらったとおり、自分の造った庭を見る人が、安らぎや安堵感を覚えてくれるようにしたいだけです」という話をしてくれました。

小林さんは、自分の仕事に誠実に向き合い、しかもそれが自然に生き方に表れている田中さんの姿に感銘したのです。



自信を持って誠実に生きよう

仕事にも生き方にも誠実さがにじみ出る人々に、私たちは敬意を感じるものです。それは私たち自身が、自覚じかくしていません。日本として持っている資質ししつだからではないでしょうか。

日本人は昔から高い道徳性を身に付



け、それを受け継ついできました。仕事に対する義務や精勤さ、正直などの誠実さは、時代が変わっても変わるものではない大切な価値です。私たちは先人から受け継いだこうした美徳びとくを、さらに次の世代に引き渡す必要があります。

それは何も難しいことではありません。

自信を持って仕事や家庭などの日常生活を誠実に生きることにはほかなりません。

私たち一人ひとりが誠実な生き方をめざし、人々を大切にしていけば、信頼できる社会、喜びのある社会の実現に向かって、必ず進んでいくことができるでしょう。